

〈研究ノート〉

Peeping Tom 的眼差しについて

——キーツとブラウニングとジェルーシャ——

甲 元 洋 子

Abstract

In this thesis two English poets, John Keats and Robert Browning, and a heroine of *Daddy-Long-Legs*, Jerusha Abbott are treated in relation to the “view of Peeping Tom,” which an American scholar points out as one of the characteristics of Keats’. Keats lived a poor but honest life of 26 years. Unlike Keats, Browning was a blessed, happy poet. He had almost everything: health, intelligence, vitality, wealth, and a beautiful family, etc. Though Keats never tried to steal a glance of a naked woman, he and Tom share the greediness to look at whatever they find beautiful. Especially Keats likes to gaze and dwell on the gorgeous interiors of splendid dwellings. On the other hand, Browning has no such gaze. Keats’ zealous gaze shows his longing for a pleasant, rich life. Jerusha, at the beginning of the story, also had an envious look at the rich. After her unexpected changes of destiny, she enjoys her campus life fully at a distinguished liberal arts college to become a cultivated woman. In this process, she dismisses her old “view of Peeping Tom” and acquires her mature way of thinking. It seems as if Jerusha had outgrown the stance of Keats and leaped to that of Browning.

〈キーツが出歯亀?!〉

19世紀英国ロマン派の詩人、ジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）を「出歯亀」呼ばわりする研究者がいたら誰もが驚くであろう。Marjorie Levinson の著書 *Keats's Life of Allegory* の240頁にこの指摘がある。「出歯

「亀」とは、「覗き見」を趣味とする人間をさす少し古い語である。もちろんアメリカ人の Levinson がこのような下卑た日本語を使うわけではなく、Godiva 伝説¹に由来する“Peeping Tom”という表現を用いているのであるが。

キーツはロンドンの下町の貸し馬車屋に生まれた。少年期に、進歩的な教育方針の小規模な私塾で過度の体罰や虐めを経験せずに純粹に勉強に集中し、文学の魅力に開眼できたことは幸いであった。しかし穏やかな日々は長く続かず、父親の事故死、母親の再婚・病死により自活の道を模索する必要が生じた。キーツはロンドンの病院で外科の助手として働きながら医学関連の勉強を続け、早々に薬剤師の免許を取得した。薬店主としての堅実な未来がここで保障され、さらに勉強を続行すれば外科医として立つことも優秀なキーツには十分可能であった。しかし当時の病院助手の仕事の過酷さ²に嫌気がさし、文学への憧れを増幅させたキーツは病院勤めを辞め、詩人の道を選択した。

詩人となったキーツは、優れた才能にも関わらず名を成すことが出来ず貧しいままであり、やがて肺結核を患い、結婚の夢も叶わずに転地先のローマの宿で26年の生涯を閉じた。金銭と健康の悩みが付きまとったが、キーツは自暴自棄にならず降りかかる色々なトラブルと対峙しつつ研鑽を積み、長足の進歩を遂げて精神的に成熟の域に達して優れた作品を書き残した。愛らしいフィアンセ、そして多くの良き友人がおり、弟たちや妹に頼りにされ慕われながら短い清貧の日々を懸命に生きたのだ。そのようなキーツの一体どこが“Peeping Tom”なのか。

Levinson が目を付けたのは、1817年に発表されたキーツの初期作品、「小さな丘の上につま先立って」(“I stood tip-toe upon a little hill”)に描かれている爪先立ちまでして美しい物を探している詩人の姿である。1816年の夏の朝、ハムステッド丘陵(Hampstead Heath)からの眺めに触発されてキーツはこの詩を書いた。未熟な作品であるが、才能の閃きを示す描写も散

見され、特に、スイートピーの花の描写は秀逸である。

Here are sweet peas, on tip-toe for a flight
 With wings of gentle flush o'er delicate white,
 And taper fingers catching at all things
 To bind them all about with tiny rings. (57-60)³

キーツは痩せていて身長は152cm⁴であった。華奢で背も低い自分が爪先立ちしている様を「花びらを翼代わりにして今にも飛び立たんばかりの姿で咲いている」スイートピーに、また、あれもこれも吸収しようとする心性を「あらゆるものに触れ、小さな巻きひげで縛って行く」蔓植物の特質に託してキーツは描いている。自己認識の確かさと描写の巧みさは流石である。視野を遠くにまで広げて一つでも多く美しい物を見るためには、小柄な彼は背伸びしなければならぬ。強い好奇心と爪先立ちという前のめりの不安定な姿勢に Levinson は“the view of Peeping Tom” (240) を嗅ぎ取ったのである。キーツ自身も己の眼差しを、詩の15行目で「この上なく貪欲な」(greediest) と形容している。もちろんこの時キーツの心にあったのは淫らな意図ではなく、美しい自然を見たいという思いのみである。しかし、見る対象が違うだけで、その貪欲さは Godiva の裸体を盗み見しようとした Tom のそれと変わらない。

さらに私は、この貪欲な眼差しは、貧しい詩人が快適に暮らす恵まれた人らに向ける好奇心の混じった羨望の眼差しでもあったと推測する。例えばハムステッドに限って言えば、現在「ロンドン北部に広がる自然公園。ぐるりと高級住宅に囲まれている」(入江, 118) ことで有名なこの景勝地も、当時は手つかずの自然そのままの広がりであり、“open fields and meadows and as yet undrained, it was wild natural country” (Hewlett, 5) であった。よってこの時のキーツの目には美しい自然の眺めや様々な植物の姿しか入っ

て来なかったはずである。ただし当時ここには新進気鋭の批評家、ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) が住んでおり、若い詩人たちが日参してきてキーツもその一人であった。彼の思想が成熟するにつれ快樂主義者のハントとは疎遠になるのであるが、この頃のキーツはまだハントの傘下にあり、彼の邸宅に頻繁に出入りしてその「居心地の良い隠れ家」⁵的雰囲気魅了されていたのだ。ハムステッドの自然を一望しながらキーツはハントの住まいも思い浮かべただろう。妻子がおり美しい庭があり、使用人も抱えて幸せに暮らしている若い批評家を羨ましく思いつつキーツはそこに佇んでいたのではなかったか。恵まれた人に向けられた貧しい若者の眼差しが、ある物語のヒロインの同様の眼差しを思い出させる。

〈ジェルーシャ〉

アメリカ人作家、ジーン・ウェブスター (Jean Webster, 1876-1916) による有名な『あしながおじさん』 (*Daddy-Long-Legs*, 1912) は、キーツの死から100年近く経って出版された少女小説である。主人公は孤児院で暮らす17才の少女、ジェルーシャ (後にジュディと改名するが、拙論ではジェルーシャで統一した)。物語は、月の最初の水曜日毎に巡ってくる評議員たちの孤児院視察への言及から始まる。気ぶっせいな一日がかりの行事もようやく終了した。早朝から働きづめだったジェルーシャは疲れ果ててしまい、窓辺に座って痛むこめかみを冷たい窓硝子に押し当てながら、遠くに見える屋敷や、そこへ帰ってゆく裕福な評議員たちをぼんやり眺めて一息入れている。

The day was ended ... Jerusha leaned forward watching with curiosity—and a touch of wistfulness—the stream of carriages and automobiles that rolled out of the asylum gates. In imagination she followed first one

equipage then another to the big houses dotted along the hillside. She pictured herself in a fur coat and a velvet hat trimmed with feathers leaning back in the seat and nonchalantly murmuring "Home" to the driver. But on the door-sill of her home the picture grew blurred.

Jerusha had an imagination ... an imagination, Mrs. Lippett told her, that would get her into trouble if she didn't take care ... but keen as it was, it could not carry her beyond the front porch of the houses she would enter. Poor, eager, adventurous little Jerusha, in all her seventeen years, had never stepped inside an ordinary houses; she could not picture the daily routine of those other human beings who carried on their lives undiscommoded by orphans. (6)⁶

今、空想の中で、彼女は毛皮のコートに身を包み、お洒落な帽子を被り、車の後部座席にもたれて自宅に帰る物憂げなお嬢様になっている。ところがその家の「玄関の敷居」で彼女の空想はストップしてしまう。生まれてから17年間ずっと孤児院で暮らしてきた彼女は「一般家庭の中」に足を踏み入れたことがない。よって、有り余るほどの豊かな想像力を持っているのに普通の家の玄関から先がどうなっているかが思い描けないのだ。

しかしこの後ストーリーは急展開を見せる。ジェルーシャの作文から彼女の優れた素質を見抜いた一人の評議員が、将来は作家になるという条件で私立の名門女子大学で勉強させてあげようと申し出てくる。現実にはありえない話なのだが、桁外れに裕福で気前の良い篤志家が、学費、寮費、生活費に、必要に応じて小遣いの追加まで潤沢に支給してくれて、捨て子で孤児院育ちで無一文だったジェルーシャが、恵まれた家庭の娘たちと肩を並べて大学生生活を謳歌することになるのだ。優秀で朗らかなジェルーシャは新しい環境にもすぐ順応し、いかにもアメリカの大学らしい自由闊達な雰囲気の中で存分に学び、実力を発揮して成長してゆく。ジェルーシャの見聞の範囲も急速に広がって「一般家庭の中」どころか大富豪の屋敷に招かれて室内をじっくり

観察する機会もやがてやって来るが、これについては後でふれる。

〈全てに恵まれた詩人〉

キーツは、孤児院時代のジェルーシャに近い。捨て子でこそないものの早くに両親を失い、親類縁者からの経済的援助は無に等しく、優れた頭脳と鋭い感性、そして明るい気性だけが財産だった。「一般家庭の中」を見ることくらいは出来たが、彼自身は死ぬまで間借り人の身で、自分の家を持つことも自分の家庭を築くこともしなかった。無い無い尽くしのキーツと対照的なのが19世紀ヴィクトリア朝時代の大詩人 Robert Browning (1812-1889) である。彼は全てに恵まれた人であった。祖父や父親から譲り受けた病気知らずの頑健な肉体と鋭い頭脳、そして強靱な精神。代々地主の家柄であったことによる豊かな財産。教養豊かで優しい両親。40過ぎてても女たちを「はしたないほど夢中にさせた」⁷美貌。相思相愛の聡明で美しい妻と彼女が産んでくれた大切な一人息子。これほど恵まれていながらこの詩人は傲慢に人を見下すことをしない。嫌みのない性格もまた彼の優れた特質である。

ブラウニングは心身ともに健全であった。反社会的行動をとっては世間を騒がせた傲慢なパイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) や、社会改革の必要性を説く一方で、最初の妻を自殺させ、その後も周囲の人々、特に女性たちに多大の犠牲を強いたシェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)、病気のためとは言えアヘン乱用で廃人同様になってしまったコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) など、ロマン派詩人たちの私生活は誠に寒々しい。キーツにはこういうアブノーマルな性癖はないが、しかし彼は貧困と病のうちに短い一生を閉じた、ある意味、やはり不幸な人であった。そうした彼らとは対照的に、ブラウニングは終始一貫して健全で幸せであり、その幸せが読者をも幸せにしてくれる。

例えば幼少期の教育。彼は小さい頃から学校生活には馴染めず、長じても

パブリックスクールや大学で学んでいない。ロンドン銀行に勤めていた彼の父親は学究肌の人で自宅に「6000冊を超える」(Ryals, 2) 本を所有していた。ブラウニングは家の書斎で父の蔵書を読み漁って勉強したのである。1888年、76才のブラウニングは“Development”という小詩を書いている。その中で、彼が5才の時に父親が飼い猫や犬、馬、使用人たちを登場人物に見立てて古代ギリシャの英雄叙事詩『イリアス』(*Iliad*)に描かれる「トロイ攻略」を解説してくれたという微笑ましい思い出が語られる。「賢明な師」(19)であった父親のおかげで5才児にも複雑なその内容が完璧に理解できて大変嬉しかったし、今もそのことを思うと嬉しくなるとブラウニングは書いている。この幸福な父と子を想像して我々読者もまた嬉しくなるのである。

This taught me who was who and what was what:
 So far I rightly understood the case
 At five years old: a huge delight it proved
 And still proves – thanks to that instructor sage
 My Father, ... (16-20)⁸

息子が9才になると、父親は彼にポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の英訳でホーマーの全作品を楽しむことを薦め、ギリシャ語の初等文法書をしっかり勉強せよと助言した。この教えに従ったブラウニングは、やがてギリシャ語の原典に親しめるようになり、12才の頃には「一端の学者」(51)になっていたとユーモアを交えて書いている。賢い父親のおかげでブラウニングは幼くして学ぶことの辛さではなく楽しさを知り、それが彼の素質をさらに磨くことに繋がったのだ。幼少期にパブリックスクールの寮に放り込まれ、サディスティックな教師らに鞭打たれたり殴られたりしながらギリシャ語・ラテン語をはじめ学問の基礎知識を、文字通り叩き込まれるのとは全く違う。良質な初歩教育はブラウニングの人格形成に大に関係していると思

う。因みにこの点については詩人キーツも同様である。彼の清々しい生き方は、貧しくて逸脱する余裕がなかったことに因るのだが、私塾の良心的な教育の結果でもあると思われる。

1845年5月、33才のブラウニングは、39才の閨秀詩人、エリザベス・バレット (Elizabeth Barrett, 1806-61) と相見え、互いに恋に落ちた。エリザベスの父親を説得することは不可能だったので二人は翌年9月、近くの教会で極秘裏に結婚し、そのままイタリアに出奔した。エリザベスが亡くなる1861年までの15年ほどをブラウニング一家はフローレンスで暮らすことになる。エリザベスは虚弱で、ブラウニングと結婚するまでは部屋に籠って寝たり起きたりの生活を送っていた。少女期の落馬事故による背骨の損傷が原因だとも言われているがそれは事実ではない。医師でもある Peter Dally が専門家の知見から、彼女は“anorexia nervosa and hysteria” (85)、つまり「拒食症およびヒステリー」による極度の衰弱状態にあったことを明らかにしている。元凶は父親のバレット氏であった。彼は教養ある裕福な紳士であったが、異常な独裁者として家族に絶対服従を強いて子供らを徹底的に支配した。この暴君に対する敬愛と恐怖の入り混じった複雑な感情とそれがもたらすストレスが娘の心身を蝕んでいたのだ。愛する男性による“the house of madman” (Chesterton, 41) からの解放は彼女にかなりの健康回復をもたらしたようで、1849年、43才の高齢で男児を出産し、ブラウニングは一児の父となった。

幸せな結婚ではあったが、病弱な妻 (と、後には嬰兒も) を抱えての、しかも外国暮らしとなれば、それなりに大変である。駈け落ちして後約10年間、ブラウニングにこれといった作品がないという事実からも彼の苦勞が解る。ブラウニングはエリザベスが機嫌よく暮らせるよう細やかなケアを怠らなかつたし、彼女も彼に頼り切っていた。彼はエリザベスにとって“at different times, a husband, lover and nurse” (Dally, 133) であったのだ。夫、恋人、看護師の三役に加え、父親として、また一家の長としての責任も負っ

ていたブラウニングに創作まで期待する方が無理である。一方妻のエリザベスは、理解ある夫に護られて幸せであった。1849年3月に出産して母となった後、同年7月には夫への熱烈な愛を歌ったソネット集 *Sonnets from the Portuguese* を上梓。翌1850年には、亡くなったワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の後任として史上初の女性桂冠詩人の候補に名が挙がるなど、公私ともに充実した日々を過ごしている。大恋愛を経て結ばれた夫婦でも、こういうアンバランスが生じると何かしらの悶着が起きるのが常である。しかしブラウニング家ではそういう事態にはならなかった。妻は読書や詩作の傍ら、降霊術に夢中になったり子供を溺愛したり⁹と、かなり好き放題にしており、片や夫は黙々と辛抱強く日常の雑務をこなしていた。同意の上の事とは言え、駆け落ち結婚にブラウニングは男としての責任を感じていたのであろう。不満も焦燥も腹立ちも何もかもを自分一人の心で消化し、黙って耐えたのだ。ブラウニングの愛情の深さと精神の強さは驚嘆に値する。

1861年6月29日早朝、55才のエリザベスはブラウニングの「腕の中で」(Dally, 195) 静かに息を引き取った。妻の埋葬を済ませるとブラウニングは息子を連れて英国に戻り、ロンドンで新たな人生を開始した。妻を喪って間もない頃、ブラウニングは “I want my new life to resemble the last fifteen years as little as possible.” (Ryals, 141) と述べたそうだ。「これまでの15年間とは全く違う新生活を送りたい」という言葉に彼の苦労や疲れが滲み出ていて胸を打たれる。妻を愛し護り抜いた夫にして初めて言える言葉である。イタリアでの15年間、ブラウニングは自分のためだけに時間と心を使うことは出来なかった。エリザベスが亡くなってしまった今、妻という最大の関心事から解放され、ブラウニングはようやく自分の生活を取り戻したのである。

ロンドンに戻ったブラウニングは、妻に先立たれた悲しみも15年のギャップも何のその、生き生きと暮らし始める。午前中は自宅で執筆、午後からは外出して文芸クラブで読書や食事というライフ・スタイルが早々に出来上

がった。ロンドンでは1863年から地下鉄の敷設が始まるのだが、ブラウニングはこの新しい交通機関も上手く利用してあちこちの会合にまめに顔を出しては社交を楽しんだ。妻亡き後、ブラウニングはさらに28年を生きたが、充実した幸せな老後であった。「これまでの15年間とは全く違う新生活を送りたい」という望みを彼は叶えたのである。言うまでもないが、この28年の間も彼はエリザベスに誠実であった。既に述べたように中年を過ぎてても十分にハンサムであり、また如才のない社交家であったが、再婚はせず、浮いた噂も立てず、心の奥の祭壇に亡き妻を祀って独身を貫き、1889年に77才で亡くなる間際まで詩作に打ち込んで意気軒昂であった。

〈家の中〉

恵まれた生活に憧れたキーツと恵まれた生活が当たり前だったブラウニング。二人の違いは、作品中の室内描写にも見て取れて興味深い。キーツは、美しい広々とした部屋や贅沢な家具調度など、間借り生活の貧しい身には縁がない物を何度も作品の中に出して丁寧に描く。その筆致から、リッチな住空間に対する彼の憧れが垣間見える。

1818年10月、キーツは街中でイザベラ (Isabella Jones)¹⁰という知り合いの女性と出会い、彼女の家立ち寄った。居間の有様がキーツには印象的だったようで、弟宛ての手紙の中で「趣味の良い部屋には本や絵、ナポレオンのブロンズ像、楽譜、イオリアンハープがあって鸚鵡もいて云々」(Rollins, I, 280) と詳述している。イザベラの居間は、この後すぐに書かれた「『夢想家』の断章」(“Fragment of the ‘Castle Builder’”)の中で、夢想家が空想する美しい部屋の素材となる。「月光が射しこみ、甘いオレンジの香りが露台から漂うトルコ絨毯を敷き詰めた部屋」(27-34)には「婦人手袋片方、読み古された恋物語、完成前の刺繍、壊れた弦楽器の弓、薔薇の敷物、立派なカーテン、大きな鏡、ギリシャ彫刻の像どっしりとした金銀のテーブル

ルかけ、漆黒のソファ、ぶどう酒など」(35-70)が置かれている。美しい部屋を演出するこれら諸々の小道具は、少しづつ形を変えはするが、翌1819年に書かれた傑作『聖アグニス前夜』(*The Eve of St. Agnes*)、『聖マルコ前夜』(*The Eve of St. Mark*)、そして『レイミア』(*Lamia*)、Part II に於いて、マデライン姫の私室、町娘バーサの居室、妖婦レイミアの寝室や彼女が魔法でこしらえる宴の間の描写でも再利用される。

ここでは物語詩『レイミア』の第二部を取り上げる。第二部では、美青年をたぶらかした美女(=蛇)が本性を暴かれて破滅する経緯が語られている。魔性の美女レイミアは青年リシアスに一目惚れし、彼を誘惑して自分の館に連れ帰り、幸せな同棲を開始する。「甘い罪の宮殿」(31)に籠って蜜月を過ごす彼らの安逸の部屋は、いかにも快適そうで美しい。「夜毎に二人で横たわる寝椅子」(16-18)の傍に窓があり、「軽やかな薄いカーテンが、金色のリボンが解けて／ふんわりと翻ると／二本の大理石の柱の間から／澄んだ青い夏の空が見えた」(18-22)。ところがその窓から「燕の囀りをかき消して鋭い／喇叭の響きが入ってきて」(27-28)リシアスをハッとさせる。忘れていた俗世を思い出した彼は、知人友人を多く招いて結婚披露宴を催したいと言い出す。レイミアは反対するがリシアスを説得することは出来ず、妖術を用いてこの上なく豪華な披露宴の間を作るしかなかった。

Fresh carved cedar, mimicking a glade
 Of palm and plantain, met from each side,
 High in the midst, in honour of the bride,
 Two palms and then two plantains, and so on,
 From either side their stems branches one to one
 All down the aisled place: and beneath all
 There ran a stream of lamps straight on from wall to wall.
 So canopied lay an untasted feast

Teeming with odours. Lamia, regal dressed,
 Silently paced about, and as she went,
 In pale contented sort of discontent,
 Missioned her viewless servants to enrich
 The fretted splendour of each nook and nitch.
 Between the tree-stems, marbled plain at first,
 Came jasper panels; then, anon, there burst
 Forth creeping imagery of slighter trees,
 And with the larger wove in small intricacies. (125-141)

南国の樹木を模して彫られた杉の柱が幾本も並び、ランプは壁から壁へと流れるように続く。まるで無限に部屋が伸びてゆくようである。壁の凹みや隅にも複雑な凝った網目模様の細工が施され、この館がいかに広く、また贅沢に作られているかが解る。幻の召使たちが美酒美食を運んで宴もたけなわと言う時に、招かれざる客、アポロニウス（＝リシアスの師・哲学者）が登場して情け容赦なく真相を暴く。レイミアは豪邸ともども消失し、リシアスはそのショックで即死する。

〈ジェルーシャの批評眼〉

ここで再び『あしながおじさん』に戻る。大学2年生の時、ジェルーシャは生まれて初めてニュー・ヨークに小旅行をした。寮で同室のジュリア（＝大富豪の令嬢）の、これまた大金持ちの叔父が姪とその友人を観劇に招待してくれたのだ。大都会の喧騒に目を丸くし、女性専用的高级ホテルに泊まり、有名料理店で食事をして本物の俳優が演じるシェイクスピア劇を観て感激し…と、おのほりさんのジェルーシャは人生初の贅沢に興奮しどおしであった。ジュリアのショッピングに付きあって高級帽子店に入った際には、店の内装

の豪華さや女主人の美しさに圧倒されてしまう。

Julia went into the very most gorgeous place I ever saw, white and gold walls and blue carpets and blue silk curtains and gilt chairs. A perfectly beautiful lady with yellow hair and a long black silk trailing gown came to meet us with a welcoming smile. (65)

8か月後、大学3年生のジェルーシャは、令嬢ジュリアがクリスマス休暇に実家に招いてくれたので再びニュー・ヨークへ行く。大富豪の生活を間近に見て目くるめく思いを何度も味わうのであるが、休暇が終わって大学の寮に戻ったジェルーシャが「あしながおじさん」への手紙に記したのは、羨望が混じった興奮の余韻ではなく、金満家の華麗な生活に対する冷めた思いであった。世話になった家の悪口を言うのは無礼だと断った上で、ジェルーシャは裕福な人らを“criticize” (97) する。高級な家具調度置かれた凝った内装の美しい部屋に集う立派な装いの品の良い人たち。だが彼らがまともな会話をしたのを聞いたことがない、ミセス・ペンドルトン (=ジュリアの母親) の頭には宝石とドレスの仕立てと社交の予定しかないのだ、あの家には思想というものが入ったことがないのではないか。特に印象的なのが次の部分である。

I've seen loads of theaters and hotels and beautiful houses. My mind is confused jumble of onyx and gilding and mosaic floors and palms. I'm still pretty breathless but I am glad to get back to college and my books ... I believe that I really am a student; this atmosphere of academic calm I found more bracing than New York. College is a very satisfying sort of life; the books and study and regular classes keep you alive mentally, and then when your mind gets tired, you have the gymnasium and outdoor athletics, and always plenty of congenial friends who are thinking about the same things you are. (97)

ここで言及されている「オニキス（縞瑪瑙）、金メッキ、モザイク模様の床、シュロの木」からは、キーツの『レイミア』の幻の宮殿の宴の間の装飾が思い出される。初めてニュー・ヨークに行った時には、見る物全てに仰天して目を見張ったジェルーシャだったが、それから1年もしないうちに、裕福な上流階級の人らの立派な住居や贅沢な生活の、華やかな上辺の下に隠された本質を見抜き、自分の価値観に照らして批判するまでになっている。彼女には日常の生活環境、つまり「アカデミックで静かな雰囲気のある大学」の方が好ましく感じられるのだと言う。あくまでも物語上のことではあるのだが、大学で3年ほどを過ごすうちに一人の孤児がここまでの自信や審美眼や批評眼を持つようになったのである。確かに入学当初から彼女は、同室の令嬢ジュリアに対し、羨望の念を抱きつつも冷静ではあった。ジュリアが令嬢風を吹かせて持ち込んでくる贅沢な衣服や物品に驚きはするが、いつまでも拘泥することはない。作者のウェブスター自身が、資本主義が急速な発展をとげる19世紀末の豊かなアメリカの恵まれた家庭に育ち¹¹それなりの贅沢を経験していたことによる余裕が主人公に反映されているのであろう。しかしともかく、ジェルーシャという優秀な少女が、金銭の心配をしなくて済む幸運に生まれ、大学と言う知的な環境の中で貪欲に学び様々な経験をすることで、孤児院時代の“Peeping Tom”的な眼差しを早々と超克し、巨万の富や派手な社交に幻惑されない落ち着いた知的な教養人になってきていることが明白である。

『レイミア』において老哲学者は、魔性の女に搦めとられた愛弟子を夢の世界から日常世界へ連れ戻そうと試みた。しかし青年は、目覚めて現実の学究生活に戻るのではなく、夢の世界が潰えた悲しみに耐えられず死んでしまう。キーツの心に残っている現実忌避願望¹²をこの青年が体現しているから、これは当然の結末である。豪華な館と絶世の美女が消失した跡には青年の死体が転がっており、傍に厳格な老人と事情が呑み込めず茫然としている婚礼の客たち¹³が佇んでいるだけである。正に夢も希望もない光景な

のだが、これがキーツにとっての現実だった。キーツもジェルーシャ同様に才気煥発な若者であったが彼の日常は架空の物語のように甘くない。元々貧しい上に作品の売れ行きも悪くて経済的な見通しが全く立たず、金銭の苦勞が常にあったこと、そして詩人として脂がのって来た時期に結核の症状が深刻化し、医学の知識があるだけに一層死の恐怖に怯えなければならなかったことなどを思えば、苦勞や悩みの無い安楽な生活に対する彼の憧れが如何に強かったかがよく解る。ジェルーシャのように自分の日常に満足し、金より教養だと嘯いて贅沢に暮らす人らを突き放して眺めることは難しかったであろう。

〈再び家の中〉

ブラウニングの詩集『男と女』(*Men and Women*, 1855)の中に「人生における愛」(“Love in a Life”)という小詩がある。共に住む大きな家の中、男が女を追いかけて行くが、女は巧みに逃げてしまい掴まえない。夫婦・恋人であっても女心は捉え難い、否、女心に限らず、どんなに親しい間柄でも互いに相手の本心や本性を完全に把握することは不可能だという真実を、建物を使って巧みに表した面白い詩である。

1.

Room after room,
I hunt the house through
We inhabit together.
Heart, fear nothing, for, heart, thou shalt find her,
Next time, herself! —not the trouble behind her
Left in the curtain, the couch's perfume!
As she brushed it, the cornice-wreath blossomed anew, —

Yon looking-glass gleamed at the wave of her feather.

2.

Yet the day wears,
 And door succeeds door;
 I try the fresh fortune—
 Range the wide house from the wing to the centre.
 Still the same chance! She goes out as I enter.
 Spend my whole day in the quest,—who cares?
 But 'tis twilight, you see,—with such suites to explore,
 Such closets to search, such alcoves to importune!

部屋から部屋へ女を追って行く男に解るのは、女がそこにいたという気配だけである。逃げて行くときに女の体が触れたらしく、「カーテンが僅かに揺れ／（ついさっきまで座っていた）長椅子には香水の残り香が漂い／軒蛇腹に彫られた花が新たに咲いたように見え／鏡に女の羽飾りがチラと映って輝く」。「端から中心へと広い家を徘徊しても／結果はいつも同じ。私が入ると彼女は出て行く。／今日もこうして一日が潰れたが、なかに構うものか。／まだまだ部屋はたくさん続くし／クローゼットや小部屋（アルコーブ）もあるのに、もう夕暮れだ。」難しい永遠の課題なのであろうが男は諦めない。「恐れるな」と自分に言い聞かせて強気である。

ブラウニングは部屋数の多い大きな家を、無限の広がりを持つ人間の心の表象として巧く用いているのであるが、そのイメージの元になったのは彼が実際に住んでいたフローレンスの“Casa Guidi”であろう。ブラウニング夫妻は1848年6月20日に、先ずは「3ヶ月」の賃貸契約をしてここに住み始めるのだが、その時に彼らが借りたのは“seven furnished rooms”（Garrett, 76）であった。宮殿のような豪邸ではないが、大きな立派な住いである。ブ

ラウニング関連の書物には“Casa Guidi”の客間の絵が掲載されていることが多い。インターネットの画像検索によっても昔のままに修復された客間の写真を見ることが出来る。広い部屋の高い天井からシャンデリアがぶら下がり、重厚な作りの長椅子や肘掛け椅子、テーブルなどの幾つもの家具が置かれ、マントルピースの上には綺麗な額入りの鏡が掛かり、壁には幾枚もの絵が飾られ、美しく明るい快適な感じの部屋である。他の部屋も、客間ほどではないにしてもそれ相応にちゃんと“furnish”されていたであろう。窓には上質の「カーテン」が掛かり、立派な「長椅子」や「鏡」が置かれ、「クローゼット」や「アルコーブ」もあって…と言う具合に。しかしブラウニングは部屋の内装や家具調度などについて詳述することはない。

例えばイザベラ・ジョーンズのリッチな部屋に招き入れられ、趣味の良い家具や装飾品を目にした時、貧しいキーツは自分の身の回りにないそれら一つ一つを“Peeping Tom”の眼差しで舐めるように見つめたのではないだろうか。そしてその記憶を後から反芻し、敷衍して作品の中に取り入れて楽しんだのだ。一方、余裕のあるブラウニングにとっては、大きな家や部屋、立派な家具調度などは日常茶飯の事象であり、特に見入って描写する対象ではなかった。そんな周縁の「物」ではなく、それらを使いながら生きている人間の「心」の不思議さに彼は集中している。そしてこの難しいテーマを寧ろ楽しんで扱っているように見える。女の心を掴もうとしては失敗するが、一向にめげも諦めもしないこの男の心は、ブラウニングの特色である前向きで楽天的で強靱な心性そのものである。同時に、掴みどころのない女心を謎のままいつまでも楽しんでおれば良いではないかという、焦らず騒がずの落ち着きも読み取れる気がする。

身をかわす女を追い求めながら男が味わっているのは、キーツが「輝く星よ」(“Bright star! Would I were steadfast as thou art”)の中で示した不思議な解脱の境地“sweet unrest”(12)ではないだろうか。「輝く星よ」は1819年の11月に書かれたソネットである。この頃キーツの病はかなり進行し、

情緒不安定になることが多く、フィアンセのファニー (Fanny Brawne) と些細な事で揉めることも度々でキーツは嫉妬や焦燥に苦しんだ。穏やかな心を希求する彼の切実な気持が表されたのがこの作品である。ただしキーツは、「輝く星 (=北極星)」のような不動の心が欲しい、そうすれば嫉妬も怒りも何も感じないから楽だ、と言っているのではない。「そうではないのだ」とキーツは強く否定する。

No—yet still steadfast, still unchangeable,
 Pillowed upon my fair love's ripening breast,
 To feel for ever its soft fall and swell,
 Awake for ever in a sweet unrest, (9-12)

天の高みから現世の諸相を静観するのではなく、この地上にあって「美しい恋人の熟れて行く胸に枕して／いつまでもその胸の上がり下がりを感じながら／甘美な不安の中で目覚めていたい」とキーツは切望する。恋人との関係の中に甘美な平安を見出して憩うのではなく、彼女がもたらす「不安」を「甘さ」として味わいつつ「目覚めて」いる……人生の妙味の一つであろう。ただ、この凄みのある、大人の味とも言うべき渋い趣を、理屈ではなく本当に身に沁みて心底から味わうためには、ブラウニングのように悠揚と健やかに長く生きて様々な豊かな人生経験を積み重ねることが必要なのではないか。研ぎ澄まされた頭脳と感覚でこんな奥深いところまで見通していながらも若く貧しいキーツには、その方法で人生をじっくりと賞味する余裕はなく、このソネットを書いてから1年余りして亡くなった。

〈最後 に〉

拙論ではキーツ、ブラウニング、そしてジェルーシャを一緒に論じた。実

在した2人の英国詩人と、ジェルーシャという架空の人物とを同じ組上に載せるのはアカデミックなやり方ではないかもしれない。しかし、ジェルーシャにはこの詩人たちと妙に符合する部分があって言及せずにはおれなかった。

『あしながおじさん』の作者ウェブスターは、恵まれた教養のある家庭で育った。その点ではブラウニングと同類である。ただし全くの苦勞知らずという訳ではなく、8才のときに父親の自殺¹⁴という悲劇に見舞われている。Elaine Showalter が *Daddy-Long-Legs* に付けた“Introduction”によると、この事件以降ウェブスターは権威に対する“protest” (x) を一貫して意識するようになったとのことであり、その反骨の精神はジェルーシャにも十分に反映され、彼女を覇気のある人物に仕立て上げている。当時の少女小説のヒロインたちとは異なってジェルーシャには“sentimentality and preachiness” (vii) が全くないという指摘も面白い。悲劇のヒロインぶってメソメソしたり、優等生ぶって説教を垂れたりしないアッサリ感。捨て子で孤児院育ちと言うハンディを自分の努力で克服して行く強さ。機知に富んだ朗らかな性格。当節流行の言葉を使えば「男前」と評されるにピッタリのジェルーシャの心意気は物語の大きな魅力であるし、この特色はキーツやブラウニングにも共通している。

『あしながおじさん』はウェブスターが38才のときの作品である。大学卒業後、作家となって社会進出を果たし、海外にも旅行するなどして見聞を広げた彼女の、年齢相応の教養や自信がジェルーシャの言動に反映されているのであって、もし実際に孤児院で17年間暮らしてきた娘にいきなりジェルーシャと同じチャンスを与えたとして、これほど急速かつ順調に精神成長を遂げるかどうかは疑わしい。ジェルーシャはあくまで特別な作中人物にしかすぎないのだ。しかし、この架空の人物が、経済的な保障を得てリベラル・アーツの女子大学に送り込まれ、そのアカデミックな環境の中で良き仲間と切磋琢磨しつつ様々な分野を存分に学んで知見を拓くことによって、中庸を

得た冷静な物の見方を会得し、見識のある教養人へと変化・成長して行くプロセスに大学教育の理想を見ることは出来ると思う。

『あしながおじさん』は、古い世代の者にとっては、小・中学校時代のどこかで出会うはずの面白い物語なのだが、今は大学生ですら殆どの者がこの本を読んでいないようだ。時代が変わったことを痛感させられる。100年以上昔に書かれた物語でありながら、そこに描かれるキャンパス・ライフは明るく自由で活気に溢れ、現在の同志社女子大学のそれと比べても遜色がない。特にジェルーシャたちの寮生活は、部屋の広さやその家具調度、はたまた毎日の食事・デザートの内容に至るまで、同女大の現在の寮や、あるいは学生マンションでの暮らしを遥かに凌駕して贅沢で、流石アメリカと思わせられる。ジェルーシャたちの知的好奇心の旺盛さや負けん気全開の猛勉強ぶりに刺激を受けるもよし、彼女らのお洒落や食べ物や遊びやらの勉強以外の部分を楽しむもよし、とにかく一人でも多くの学生諸姉にこの小説に親しんでほしいと思う。そして、ここに描かれた澁刺とした若い女性たちの姿に触発され、同志社女子大学という恵まれた美しい環境の中でジェルーシャのようにイキイキと学び、気骨のある女性になって欲しいと希望する。

注

- 1 Godiva (ゴダイヴァ, 1040?-?80) は、夫が領民に課した重税を廃止させようとした。夫が「白昼に全裸で馬に乗ってコヴェントリー (Coventry) の街中を練り歩けば廃止する」と言ったので彼女はこれを実行した。人々は深く感謝して彼女が通り過ぎるまで窓も戸も閉ざして家に籠って奥方の裸体を見ないようにしたが、仕立て屋の Tom だけは覗き見をしようとしたので天罰が当たって目が潰れたと伝えられている。性的好奇心を持って覗き見をする男を表す "Peeping Tom" という言葉はこの故事に由来する。
- 2 キーツが外科助手として担っていた仕事は、手術 (麻酔薬不使用) の補助および外来・入院患者の世話、特に包帯の交換と洗浄などの雑務であった。麻酔なしの手術現場は阿鼻叫喚の地獄であり、日々の雑務は血膿まみれの重労働であった。病院の助手たちに休憩・食事の場として提供された談話室には、解剖材料として

- 夜間に墓場から盗んで来た死体が置かれているという有様だった。このような状況下、研修生たちの心は荒みがちで、飲酒や賭け事で憂さを晴らすなど粗暴な振る舞いをする者が多かった。また病院もキーツの下宿も汚いゴミゴミした場所であって、殺伐とした環境が繊細なキーツには苦痛でたまらず、文学に方向転換したのである。キーツの医学修行に関しては Nicholas Roe の *John Keats and the Culture of Dissent* (1997) の160-171頁に詳しい説明がある。
- 3 キーツの詩は Miriam Allott の編集による詩集、*The Poems of John Keats* (1970) より引用した。
 - 4 キーツは1818年7月22日の手紙で自分の身長は“five feet”だと述べている。
5 フィートは約152cmである。(cf. Rollins, I, 342)
 - 5 初期作品“Sleep and Poetry” (1816) の325行でキーツはハントの家を“snug retreat” (居心地の良い隠れ家) と表現している。
 - 6 『あしながおじさん』からの引用は Elaine Showalter 編集の Penguin Books, *Daddy-Long-Legs and Dear Enemy* (2004) に依った。
 - 7 晩年のエリザベスは手紙に夫のことを「何処へ行っても女たちが、はしたなくらい彼に夢中になります」と書いている。(cf. Dally, 193)
 - 8 ブラウニングの詩は Richard Cronin と Dorothy McMillan 編集の *21st-century Oxford Authors Robert Browning* (2015) より引用した。
 - 9 エリザベスは当時流行の「降霊術」に夢中になった。また一人息子に女の子の服を着せて溺愛した。ブラウニングはこのいずれにも全く共感できなかったが、結局は妻の好きなようにさせていた。これらについては Dally の研究書に詳しい説明があり (145頁, 158-9頁, 164頁) 興味深い。聡明なエリザベスも子育てに関しては全くの愚母で、息子の Penini をとことん甘やかした。Penini は完全にエリザベスを舐めてかかり、彼女が読み書きを教えたが上達しなかった。ブラウニングは音楽、特にピアノを教えたが、きちんとしつけて過度に甘やかすことはなかったので Penini も父親の言うことは素直に聞いたと言う。
 - 10 Isabella Jones が、ある政治家の愛人のような立場であったことを Gittings は *John Keats* の139頁で匂わせている。イザベラは若い独身女性ではあったが、当然、金銭の余裕があり、家の中もそれなりに贅沢に美しく整えられていたはずである。
 - 11 ウェブスターは、母親の叔父にマーク・トゥエイン (Mark Twain, 1835-1910) を持つ裕福な家庭に生まれ、恵まれた環境の中で育って、米国名門女子大の一つであるバツサー・カレッジ (Vassar College) で学んだ。
 - 12 キーツの生涯のテーマは現実と非現実の相克であった。過酷な現実の中で、美しい理想世界への憧れを表現することからスタートしたキーツであったが、やが

て現実忌避の虚しさに気付き、清濁混在の現実を受容できる詩人を目指すようになって急速な精神成長を遂げる。詩人としての成熟期に書かれた傑作においては当然、現実忌避願望は否定される。非現実世界は崩壊し、夢想者たちは滅びる。しかし、若いキーツの心の中で、快樂原則が満たされる夢の世界への憧れが完全に払拭されずに燻っていたことも事実であり、彼はその密かな欲望を、滅びることを前提に夢幻世界を詳述するという手法で満足させていた。

- 13 宴席でたらふく飲み食いし、酔っぱらって羽目を外す客達は、粗野で凡庸で文芸に無関心な人間の象徴である。現実生活の中で、粗野な凡人たちの無神経な言動にキーツが苛立つことは多々あった。気の置けない弟宛ての手紙の中で詩人は彼らに対する嫌悪感を吐露している。例えば「あいつらはブリキの薬缶と大して変わらん」(Rollins, II, 43) など。
- 14 ウェブスターの父親は、作家のマーク・トウェインと共同で出版社を経営し、彼の作品を出版するなどして精力的に働いて実績を上げていたが、仕事のストレスから精神を病み、トウェインからも疎まれて解雇されたのを苦に自殺した。

引用文献

- Allott, Miriam. *The Poems of John Keats*. London: Longman, 1970.
- Chesterton, Gilbert Keith. *Robert Browning*. Teddington: The Echo Press, 2006.
- Cronin, Richard & McMillan, Dorothy (ed.) *21st-century Oxford Authors Robert Browning*. Oxford University Press, 2015.
- Dally, Peter. *Elizabeth Barrett Browning A Psychological Portrait*. London: Macmillan, 1989.
- Garrett, Martin. *Browning Chronology Elizabeth Barrett and Robert Browning*. London: Macmillan, 2000.
- Gittings, Robert. *John Keats*. London: Heinemann, 1968.
- Hewlett, Dorothy. *A Life of John Keats*. Hutchinson: Radius Book, 1970.
- 入江敦彦『英国の OFF 上手な人生の休み方』東京:新潮社 2013年。
- Levinson, Marjory. *Keats's Life of Allegory: The Origins of a Style*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Roe, Nicholas. *John Keats and the Culture of Dissent*. Oxford: Clarendon Press, 1997.
- Rollins, Hyder E. (ed.) *The Letters of John Keats*. 2vols. Cambridge: Harvard Univ. Press, 1976.
- Ryals, Clyde De L. *The Life of Robert Browning A Critical Biography*, Oxford:

Blackwell, 1993.

Showalter, Elaine (ed.) *Jean Webster : Daddy-Long-Legs and Dear Enemy*. New York: Penguin Books, 2004.